

# AQUA

一般社団法人BMW技術協会 機関紙

## 3月号

2026 MARCH

No. 399

写真：耶馬溪ファームの飲水改善プラント(右)と排水処理・生物活性水プラント(左)

## プラント動向～耶馬溪ファーム(大分県中津市)

～新農場の建設、BMW技術の導入が進んでいます～



大分県中津市耶馬溪町の耶馬溪ファームは、グリーンコープの産

直びん牛乳を生産する酪農場として、昨年からの農場建設が始まっています。乳牛1000頭規模の農場には、飲水改善プラント、パーラーから出る排水を処理する排水処理プラント、その処理水を原料に生物活性水プラントが導入されます。

飲水改善プラントは日使用量180t、排水処理は日排水量25t(最大30t)、生物活性水の日生産量は約2t、西日本では最大規模のBMプラントになります。

昨年10月に配管工事が完了し、その後自然石槽への軽石と花崗岩の投入などを行いました。11月から建屋の建設が始まり、プラントの建物としては完成しました。現在は、機械類の設置、電気工事、畜舎や堆肥場とプラントを繋ぐ配管など、内部の工事を進めています。

なお、農場の開所は7月1日(水)に予定されており、5月中旬からはプラントの試運転を開始する予定でいます。

◎プロアと汚泥脱水機の設置をおこないました。

2月16日から3日間、曝気用のプロアと汚泥脱水機の設置を行いました。

プロアは曝気用の空気を送る機械です。飲水改善プラントには1台、排水処理プラントと生物活性水プラントには合わせて6台(予備含む)のプロアを設置して、メインエア配管と接続しました。

さらに、排水処理プラントには、処理過程で出てくる余剰の汚泥を処理する汚泥脱水機の搬入と据付けを行いました。この機械は汚泥脱水機本体と攪拌するタンク、凝集剤の添加装置などが一体となっており、総重量が420kgもあります。

荷下ろしにはフォークリフトを使用しましたが、この機械を設置する汚泥脱水機室のコンクリート製の台座に乗せるには、試行錯誤が必要で少し苦労しました。

設置には3日間かかり、全て無事に設置することができました。

また、プラント土木槽の開口部の周りには、槽内に落ちないように手すりも取り付けられ、安全に作業ができるようになりました。

(報告・匠集団そら星加浩)

◎耶馬溪ファームについて

耶馬溪ファームの総面積は8.3ha、乳牛の飼養頭数は仔牛などを含め約千頭、年間8千トンの乳量の生産を目指します。同じく中津市山国町には牛乳を瓶に詰める工場「グリーンコープミルク」が新設され、2025年春から本格稼働していきます。

また、日田市にはTMRセンター(飼料配合施設)注釈①が新設さ



据え付けられたブロー



据え付けられた汚泥脱水機



落下防止用の手すり



TMRセンター

グリーンコープミルク 工場内部

耶馬溪ファームの堆肥発酵槽

れ、飼料原料の国産化に向けて、産直青果・米生産者、取引メーカー（食品加工・飲料）の協力のもと、耕作放棄地などを活用した飼料用作物の栽培プロジェクトをすすめています。

現在、グリーンコープの産直青果・米生産者が、粗飼料となるWCS稲（飼料用稲）・サイレージコーン、イタリアンライグラスが九州各地で栽培をはじめました。その他、配合飼料や乾牧草など、当面は輸入に頼らざるを得ない原料の一部は、遺伝子組み換えのものが混入しないよう適切に分別生産流通管理された飼料を調達しています。

グリーンコープの取引メーカーからは、発酵飼料の原料としてウイスキー粕や米（破碎米など）、そうめんの端材などの提供を受け、未利用資源も活用した地域内畜産循環型農業を確立しています。

【注釈①】TMRとは、Total・Mixed・Rationの頭文字で「混合飼料」「完全飼料」などとも呼ばれ、栄養を考えながら粗飼料と濃厚飼料を混ぜ合わせて牛にエサとして与える方法です。これを大きな規模で行い、畜

産農家に混ぜ合わせた栄養価の高いエサを提供しているのがTMRセンターと呼ばれる施設です。

グリーンコープが供給している産直びん牛乳は、人体に有害な菌のみを死滅させ、生乳の風味を最大限に残した72℃、15秒殺菌のパスチャライズ牛乳であり、ホモゲナイズ（乳脂肪を砕いて均質化）しないノンホモパスチャライズ牛乳です。当初は紙パックでしたが、2003年からリユースびんによる供給が始まりました。

2021年、それまで供給していたびん牛乳が事情により作れなくなることに伴い、グリーンコープでは下郷農業協同組合と同農協の酪農生産者で話し合いをはじめ、グリーンコープの産直びん牛乳の生産に必要な千頭規模の酪農場の建設に合意しました。

この計画が始まると同時に、BMW技術協会に糞尿処理などについて相談をいただき、乳牛の飼養方法、飲水改善から堆肥製造などについての検討、意見交換を行なってきて、現在に至っています。

（報告：BMW技術協会 秋山澄晃）

## BMWトピックス

### ◎BMW技術協会常任理事会・匠集団そら取締役会

1月27日（火）、オンラインでBMW技術協会常任理事会と匠集団そら取締役会が開催されました。BMW技術協会常任理事会では、昨年10月から今年1月までに活動報告、第34回BMW技術全国交流会の報告などが行なわれました。続いて、今年の第35回BMW技術全国交流会を岡山で開催することを確認し、さらに2027年から2029年までの全国交流会開催地について意見交換を行ない、開催候補地を確認しました。

匠集団そら取締役会では、第33期（2025年2月から2026年1月）の事業報告と決算予測報告が行なわれ、第33期は利益計上となることが報告されました。また、第33期株主総会を4月9日に開催することを確認しました。

### ◎やまなし自然塾／賀詞交歓会

2月4日（水）、山梨県甲府市にてやまなし自然塾の賀詞交歓会が開催され、果樹生産者をはじめ、若手も含め約30名の出席がありました。さらに西日本BMW技術協会の宮崎利明さんもゲスト参加されました。

会の冒頭に萩原貴司会長（萩原フルーツ農園）から、「気象変動の影響でサクランボや桃などが作りづらくなってきていると言われています。生産者同士でしっかり情報交換をしつつ、消費者の皆さん

に美味しく食べてもらえるよう務めていきましよう」と挨拶がありました。

次に向山洋平事務局長（黒富士農場）から、昨年の出荷実績、第15回オーガニックフェスタやまなし、第34回BMW技術全国交流会への参加報告と、来年度（2026年4月以降）の活動計画についての報告が行なわれました。その後の懇親会では、会員同士で交流を深めました。



やまなし自然塾 萩原貴司会長

### ◎第34回BMW技術全国交流会実行委員会

2月9日（月）、茨城県水戸市のパルシウム茨城栃木の会議室にて、第34回BMW技術全国交流会の最後の実行委員会が開催されました。出席者は清水裕一実行委員長（茨城BM）をはじめ15名、昨年11月に開催された全国交流会の振り返りを行ないました。

全国交流会は大きなトラブルもなく無事に終了できたこと、茨城BMの取り組みなど多くの刺激を得たことなどが報告されました。参加人数は交流会161名、懇親会148名、宿泊121名、視察Aコース19名、視察Bコース30名、視察Cコース18名、視察Dコース28名。懇親会へは、47の団体・個人から52品目の食材

提供をいただいたことの報告も行なわれました。

最後に、出席した実行委員全員に全国交流会の感想を伺いました。

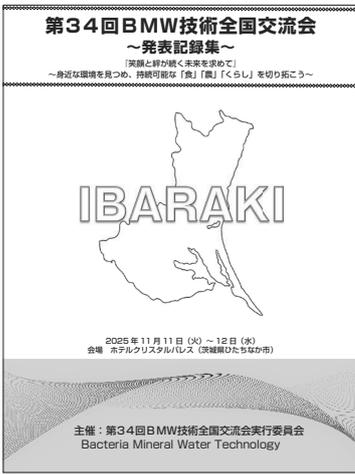
○全国から多くの人達に参加してもらい、茨城の取り組みや茨城県そのものについて知ってもらえて良かった。

○茨城の中でも横の繋がりができて良かったと同時に、全国の皆さんと繋がることができて良かった。

○単なる技術発表だけでなく、奥地先生から地球の歴史、川田先生から土壌と微生物を通してミネラルの関係を学ぶことができた。

その他にも様々な感想や意見がありましたが、最後に清水実行委員長から、「今回の第34回BMW技術全国交流会は成功裏に終えることができました。実行委員会を始め、参加していただいた全国の皆さんに感謝を申し上げます。今後にも引き続き、技術向上におげ学習、研究を続けていきたいので、よろしくお願ひします。」と締めくくられました。

実行委員会の皆様、全国交流会の開催にご尽力いただき、ありがとうございました。



### ◎第25回BMW技術基礎セミナーが開催されました。

2月26日(木)から27日(金)の2日間、第25回BMW技術基礎セミナーが開催されました。BMW技術基礎セミナーは、BMW技術協会の若手幹事会によって企画・運営されています。

2月26日(木)は、東京都千代田区のエッサム本社ビル「こだまホール」にて、オープンフォーラムとして開催され、会場に35名、オンラインで40名の参加がありました。

基調講演は、東京大学大学院特任教授・名誉教授の鈴木宣弘氏をお迎えし、「これからの食と農、新しいカタチを求めて」と題して、令和の米騒動といわれる米価高騰、農政の対応、生産者と消費者の動向を踏まえ、日本の食料・農業の本質と裏側について突っ込んだお話しや、これからの食と農についての課題、問題提起を聞かせていただきました。

講演後はオープンフォーラムを開催し



セミナー会場全体



名誉教授  
鈴木宣弘



オープンフォーラム

ました。フォーラムには鈴木教授にご参加いただき、4名の登壇者をはじめ、会場とオンラインの参加者からも意見をいただき、「新しいカタチ」についての議論が行なわれました。

さらに4人の生産者による、昨年(2025年)のBMW技術、生物活性水を使用した実験の取り組みと、今年(2026年)の取り組みについて発表が行なわれ、一日目は終了しました。

翌27日(金)は、茨城県内にて茨城BMWの視察がおこなわれました。参加者は19名、昨年11月の全国交流会に参加できなかった方や、参加したけれど視察コースに参加しなかった方を対象に、BMW技術(生物活性水)の可能性を探究する若手生産者の圃場にて視察を行ないました。

第25回BMW技術セミナーについては、来月4月号(AQUA400号)にて詳しく報告します。

(報告：BMW技術協会事務局 秋山澄兄)

### ◎全国交流会記録集について

第34回BMW技術全国交流会記録集は各発表の内容詳細として、各発表者の資料データと質疑応答を含む発言をすべて掲載しています。

発行は今年の2月末で、匠集団そらが販売しています。お求めはAQUAに同封(メールの場合は添付)されている、購入申込み用紙にてお申込みをお願いいたします。この用紙からお申込みの場合は、通常の販売価格よりお得な価格でご購入できます。WEBSHOPからもご購入いただけます。

### ◎書籍のご案内

「BMW糞尿・廃水処理システム」BMW技術協会顧問の長崎浩氏著書で、農文教の民間農法シリーズから発刊されている、「BMW糞尿・廃水処理システム」。BMW技術協会・匠集団そらのホームページのWEBショップでご購入できます。BMW技術のバイブル、この機会に是非、お求め下さい。



## あいこープ農法研究会報告

「誰もが有機農産物を食べられる社会をめざして」  
 ～あいこープ資源循環型農業推進プロジェクト～

2月5日（木）、宮城県仙台市秋保温泉・ホテルニュー水戸屋にて、2025年度あいこープ地場生産者研修会が開催され、あいこープみやぎの農産生産者を中心に約50名の参加があり、BMW技術協会から伊藤幸蔵理事長、磯田有治理事、事務局の秋山が出席しました。

今回の研修会のテーマは、「誰もが有機農産物を食べられる社会をめざして」

あいこープ資源循環型農業推進プロジェクト」と題して行なわれ、あいこープ農法研究会（地場生産者の中でも宮城県内の生産者による研究会）が行なってきた、「あいこープ資源循環型プロジェクト」の3年間の総括と今後の活動についての報告と、新潟県阿賀野市から夢の谷ファーム（新潟県阿賀野市）の石塚美津夫さんを迎えての基調講演などが行なわれました。

### ◎あいこープ農法研究会活動報告

#### あいこープ農法研究会

座長 西塚忠樹

あいこープ資源循環型農業推進プロジェクトは3年間の取り組みを一区切りとして、これまでの活動報告、成果報告が行われました。

・ちょうど3年前、秋保の近くの森で山土を掘り出すところからプロジェクト

トはスタートし、BMW技術協会の協力を得ながらこれまでやってきた。

・一から皆で種菌、堆肥づくりを一緒に学び、有機農業への理解を深めてきた。  
 ・メンバーそれぞれが、それぞれで手に入る資源を活用して堆肥を作ったが、全体的に目標としていたCN比15〜18に届かなかった。次回は設定値を高め（20程度）に設定していく。

・作った堆肥を施用して栽培をはじめ、すぐには結果は出ていないが、作物によっては収量が伸びてきたところ、虫害が減ったところなどもある。

・引続き、トライ＆エラーを繰り返して、試行錯誤を繰り返して取り組みを続けていきたい。

・2026年度は堆肥施用による栽培実験、応用型生物活性水の活用などの新たな取り組みを加え、引続きBMW技術協会の協力を得ながら取り組みを継続していく。

#### 【2026年度活動方針】

①土壌の改善（微生物量、微生物相、性質、適正なミネラル量）や作物の収穫量・品質の向上、病害虫対策等、目的に沿った堆肥づくり。

②BMW技術の再考と応用技術の習得（堆肥づくり、生物活性水の葉面散布



研修会会場・報告する西塚忠樹氏

用や水田用の岩石設置など）を目的とし、検証を行っていく。

③堆肥づくりのための資源確保の仕組みづくり（生協産直メーカーとの連携を強化、資源の一時ストックヤードの検討など）を構築する

次に講師としてこのプロジェクトに携わってきた、BMW技術協会理事の磯田有治氏より、西塚氏の補足と今後の課題について提案が行なわれました。

・各産地とも、作物栽培における土づくりの重要性とその基礎となる堆肥づくりの技術について学習し、堆肥づくりが緒についた。

・地域資源調査では、畜産系（牛・豚・鶏・馬）、植物系（もみ殻、米糠、廃菌床、ワカメ残渣、醤油カス）資源として多種多様なものが活用できる。  
 ・あいこープみやぎ産直食品メーカーの



研修会の参加者

加工残渣として、オカラ、醤油カス等、多様な地域資源があることが確認され、これらを有効活用する仕組みの構築により、持続可能な地域資源循環型農業が可能であることが分かった。

・堆肥づくり施設があるのは七郷クローバースファーム、ひなた農場、あいちゃん牧場と3施設に限られている。他の生産地では施設がないため、堆肥製造量が極めて限られている。ビニールハウス程度の施設でも、堆肥製造には充分可能なため、各産地での施設設置について具体的に検討することが望ましい。

### ◎基調講演「有機農業と生協産直」

NPO法人食農ネットさかさかみ 夢の谷ファーム 石塚美津夫

石塚氏が阿賀野市笹神地域で取り組む資源循環型有機農業と、旧JAさかさかみ



基調講演～石塚美津夫氏

とバルシステムとの産直交流の歴史と取り組みについての話しを伺いました。

- ・ 水稲 8.5 ha、エゴマ・ライ麦 2.5 ha、年間有機の自給率72%
- ・ 地域にある未利用資源を探し出し、可能な限り活用していくことで、多種多様な土着菌（石塚菌）を作っていくことが大切だということ。
- ・ 消費者と畑で交流することによって、農と食の結びつきの大切さを感じてもらい、一緒に作業をすることでお互いの理解を深めてきたこと。
- ・ これからは学校給食に力を入れていく。ただ食材を供給するのではなく、子供達と一緒に作っていくことで、自分の食べ物を自分で作る事が大事。

◎総評

- ・ BMW技術協会 理事長 伊藤幸蔵 最後は伊藤幸蔵理事長が総評を行いました。
- ・ あいコープ資源循環型農業推進プロジェクトは、これからの農業や社

会情勢を考えると、とても重要。地域内、生協内で資源が循環し、人も循環していく。生産者だけではなく、消費者（組合員）の皆さんにも是非この取り組みに加わってほしい。



総評～伊藤理事長

◎2月6日（金）現地視察と堆肥の確認  
翌日、今回のプロジェクトで堆肥を製造した3生産者を訪問、堆肥と圃場視察を行ないました。

訪問したのは、秋保ゆうきの会、七郷クローバーズファーム、大郷グリーンファーマーズで、現状確認と2025年度の取り組みの振りかえり、2026年度に向けての堆肥作りなどについて打合せを行ないました。



秋保ゆうきの会の渡辺重貴氏



クローバーズファームの分解途中の堆肥



大郷グリーンファーマーズの廃菌床



大郷グリーンファーマーズで堆肥の種菌を確認する熊谷剛介氏（左）と磯田有治氏

第35回BMW技術全国交流会は、11月25日（水）～26日（木）、岡山県岡山市で開催します。

昨年開催された、第34回BMW技術全国交流会にて、恒例となっていた次回の開催地の発表が事情によりできませんでした。そのため全国交流会が終わった後、岡山県の三美産業、そして西日本BMW技術協会とグリーンコープ連合会と話しを進めさせていただき、岡山での開催を決定することになりました。

実行委員会は、三美産業、グリーンコープおかやま、グリーンコープ連合会、西日本BMW技術協会、BMW技術協会構成します。キックオフミーティングは、4月16日（木）に開催予定。交流会に向け準備をすすめていきます。日程と会場はすでに決まっておりますので、皆様のスケジュールの確保をお願いいたします。

■開催概要（決定事項のみ）

日時 11月25日（水）

◎午後～交流会・懇親会

26日（木）

◎午前中～交流会

午後～オプショナル視察

会場：岡山国際ホテル（岡山県岡山市）  
今後、実行委員会や学習会の報告など、AQUA「BMW技術全国交流会への道」で報告をしていきます。

開催案内は7月下旬に皆様のお手元にお届けする予定です。



## ファーマーズ・クラブ雪月花（北海道） 北畑和男さん



うので役に立たなかったそうです。

1985年、高卒で就農しました。

——そのころの様子を聞かせてください。

そのころは、田んぼ12haに養豚をしていました。田んぼは稲作と転作物が一部ありました。養豚は自分が生まれた時には、もうやっていました。規模は小さいのですが、母豚は4〜5頭、年間70〜100頭ぐらいを出荷する一貫経営でした。農協が種オスを持っていて、母豚を農協に預けて種付けしてもらっていました。

私は田植えや稲刈り時期以外は、深川市の大谷種苗でアルバイト

をしていました。大谷種苗は、大雪みどりという枝豆の品種を独自育成するなど手広くやっている会社で、私は種やハウスの資材、テントなどを配達する仕事をしました。1994年に親父が亡くなり、1人で全部やることになったので、このアルバイトはやめました。

養豚もやめました。養豚は父の仕事であり、いざ自分でやろうとしたらうまくできなかつたからでもあります。養豚は

豚糞堆肥、あるいは尿を稲わらにかけて発酵させて堆肥として使ったりしていました。養豚をやめてからは堆肥・肥料を購入することになりました。26歳で独り立ちすることになりました。

——田んぼの作業では最初苦労されたそうですね。

親父が亡くなって26歳で自立するまで、主に自分は畑作（転作物）を担当して、親父の田んぼの作業は見るだけで、したことがありませんでした。代掻きもしたことがありませんでした。親父が亡くなって、近所の人に、「代掻きはやったことがなく分らない」と話をしたら、その人も忙しい中で、2〜3時間来てくれて、教えてもらいました。その年は、代掻きがとてもうまくいきました。その翌年、もう自分分かったつもりで、やり方に工夫をしてしまい、田んぼは凸凹になり、見事にダメでした。3年目は、教えてもらったとおりにしてうまくいきました。今、私が代掻きをうまくできるのは、その人に教えてもらったからです。

31歳で結婚するころは、一人でできるよになつていました。それでも細かいところは母がやってくれているのでうまくいっていたと思います。種まき、田植えなどの管理は母がやっていました。——では、結婚について、子どもさんについても聞かせてください。

結婚は1999年31歳の時です。妻とは浦川の飲み屋の飲み友達です。店の人が「付き合え」というので、5年くらい

北畑和男さんは、1968年2月生まれ、今年2月に58歳になる北海道妹背牛町の米農家です。北畑家は宮城県仙台市近辺から北海道深川市に、祖父の時代に妹背牛に来てから3代目だそうです。

妹背牛小学校、妹背牛中学校に行きます。中学校2年の時に「後を継ぐ」と言ったので、高校は深川農業高校に行きたいと言ったそうですが、祖父も父も「パス

代が・・・」ということで、町内にある妹背牛商業高等学校に進むことになりました。

高校の時も稲刈り、はさかけなど、農作業をしてから登校したそうです。学校が終わっても農作業を手伝うためにそのまま自宅に帰りました。周りがみんな遊んでいたの、うらやましかつたということです。商業高校なので簿記も学んだけれど、商業簿記と農業簿記では全く違

付き合っていました。店の外でも複数でも、2人でも逢っていました。そのうち、彼女が仕事を辞めて苫小牧に帰りました。連絡は取り合っていたので、久しぶりにといいことで苫小牧に遊びに行きました。

私は「結婚を意識して付き合っている」と思っていたのですが、彼女の父親から「どういふ関係だ」と言われて、結婚することになりました。(これは、本人がそのように言っているだけで、社会的には、付き合い↓相手の家訪問↓結婚の通常のルールです。)

妻は2歳下です。子どもは2人います。長男は24歳、高卒で専門学校2年、20歳



北畑さんの田んぼにて

で働き始め、パソコンのシステムプログラマーをやっています。長女は22歳で、札幌すすきののスーツパフェでパティシエを目指して働いています。

息子には、就職の際、「10年くらいはそれをやって良いが、俺が60歳〜65歳までにはあとを継ぐかどうかの結論を出してくれ」と言っています。息子は後を継ぐかどうか悩んでいます。息子の会社は札幌ですが、一緒に住んでおり、自宅でリモートで仕事をしています。拘束される時間以外で田植えだけは手伝ってくれています。この会社はとも融通が利く会社で、働く時間を早めたり遅くしたりもできます。

——お母さんのことについて聞かせてください。

母は87歳で2年くらい前に施設に入ってもらいました。祖父と祖母の介護は全部母がやりました。本人は介護の大変さがわかっていたので、「施設に入ってもよい」ということでしたが、いざその時点になると……。

母がやっていた田植えや稲刈りの段取りの仕事は、子どもが手を離れた35歳のころには妻の仕事になりました。

——雪月花に入るきっかけとその後を聞かせてください。

市川と田村とは、小中学校から一緒でした。特に仲が良かったわけではないのですが、農協青年部の時に、雑談の中で肥料設計などの話が出たら、こっそり自分で試したりしていました。

養豚をしていたので、最初から「有機

栽培」ではありましたが。若干の化成肥料、魚かすなども使っていました。「有機栽培」は主にはコストのためでもありません。養豚をやめて堆肥がなくなってきたら魚かすや化成肥料などを使っていました。

雪月花に入るきっかけは、2010年ころ、市川と田村に呼ばれて、飲み屋に行き、雪月花と一緒にやるという話でした。話を聞いて、「有機なら良い」と思い「うん」と言いました。話が具体的にになり、米沢郷牧場にも行きました。伊藤幸蔵さんはもちろんですが、横山さん、北沢さんなどすごい人に出会いました。「東北はおつかない人がいっぱいいるなあ、ひどい人と知り合いになったなあ」というのが率直な感想でした。

そして、最初に取り組んだのが、全有機肥料で除草剤1回の栽培でした。2.3haと1.1haの2枚の田んぼでやりました。反収はそれまでより、1俵くらい減り、7〜8俵取れました。カラムシへの対処法と肥料切れ対処に苦労しました。2023年まではずっと除草剤1回で4haくらいを作っていました。

2024年から、(2025年も)除草剤1回を無農薬にしました。2024年は草だらけになり、2025年は1枚(1.5ha)だけ草が多くなりました。代掻きを一度して、雑草(ヒエ)の芽が出てきたところで再度代掻きをするヒエをある程度減らせることが分かりました。JAS有機の講習は受けています。雪月花への出荷は4haの無農薬米だけです。——生物活性水をどのように活用してい

ますか。

育苗に使うと根張りが良くなります。以前、原液、300倍希釈、500倍希釈で実験したら、500倍希釈が一番良かったので500倍希釈で使っています。また、田んぼには木酢液をまくときに一緒に希釈してまくと木酢液の効きが良くなります。大豆の殺菌剤に生物活性水を使うと効きすぎる気がします。

——個人で直販しているそうですね。

40軒くらいの直販のお客さんがいます。個人で食堂をしている人からの注文の量です。親父の時からで、お客さんの中には2世代に渡って買ってきてくれる人もいます。

——これからやりたいことを聞かせてください。

北畑家の農業ということでは、息子に後を継いでほしいですね。それから、肥料が高いので、「コスト削減をしたい」と思っています。現在、水田14ha、畑作6haの合計20haですが、水田の4haだけ有機肥料を使っています。全面積を有機肥料にしたいと思っています。

雪月花については、市川に事務処理の負担が過重になっているので、事務処理の簡素化と、決めごとがわかるようになると良いと思っています。いずれ雪月花で堆肥場も作りたいと思っています。まずは、若い世代のやりたい人が増えてくると良いです。

◎聞き手西日本BMW技術協会 宮崎利明

